

2018年3月期第3四半期

決算説明会（電話会議）

要旨

開催日時：2018年2月7日（水）15：00～16：00

旭化成株式会社

予想・見通しに関する注意事項

当資料に記載されている予想・見通しは、種々の前提に基づくものであり、将来の計画数値、施策の実現を確約したり、保証したりするものではありません。

会社側参加者：

取締役 兼常務執行役員 坂本
上席執行役員 兼経理部長 有馬
石油化学事業本部 企画管理部長 堀江
高機能ポリマー事業本部 企画管理部長 桑葉
セパレータ事業本部 企画管理部長 福田
旭化成エレクトロニクス 企画管理部長 高嶋
旭化成ホームズ 経営管理部長 富岡
旭化成ファーマ 経営統括総部 経理部長 濱
IR室長 門倉

坂本 2017年度10—12月期(以下、第3四半期)は、各事業ともに堅調な需要に支えられて販売数量が順調に拡大したことに加え、石油化学製品市況の上昇や為替が円安方向に推移したことから、業績は順調に推移した。2017年度4—12月累計(以下、第3四半期累計)の業績は、数量拡大、交易条件の改善、米国税制改正の影響等により、売上高、営業利益、経常利益、四半期純利益の全てで前年同期を上回り過去最高となった。

今回見直した2017年度通期業績予想(以下、今回予想)は、為替や原油価格の動向等でやや不透明なところもあるが、2017年11月公表の通期業績予想(以下、前回予想)に対し各項目で上方修正し、過去最高値を更新する着地になると見ている。

P4 主要決算数値

第3四半期累計で、売上高は1兆4,845億円で前年同期比1,277億円、9.4%の増収、営業利益は1,492億円で351億円、30.7%の増益となった。「マテリアル」セグメントの各事業やクリティカルケア事業の販売が好調であったこと、アクリロニトリル(以下、AN)、合成ゴム等の交易条件が改善したこと等が増益の主な要因だ。また、円安

の影響も受けた。

経常利益は1,605億円で、持分法投資損益が改善したこと等から422億円、35.6%の増益となった。

親会社株主に帰属する四半期純利益は1,403億円で、政策保有株式の売却を行ったことや米国税制改正の影響により税金費用が減少したこと等から507億円、56.5%の増益となった。

ナフサ価格は第3四半期平均で44,600円/KL、第3四半期累計平均で39,933円/KLとなった。2016年度第3四半期累計平均と比較すると7,633円/KLのナフサ高となった。相場平均為替レートは第3四半期累計で112円/ドルで、前年同期比5円/ドルの円安となった。

連結貸借対照表の概況として、総資産、自己資本が増加した。D/Eレシオは、自己資本が増加したことで0.04ポイント下がり、0.31となった。

P5 連結損益計算書

売上高を1兆4,845億円計上し、売上総利益は4,820億円となった。売上高比率は32.5%と0.9ポイント改善した。ケミカル事業を中心に原料スプレッドが改善し、売上原価率が下がったこと等が主な要因だ。

販管費は3,328億円で、前年同期比188億円増加した。研究開発費が増加していることやマーケティング強化のため人員を増やしていること等が主な要因だ。

営業利益は1,492億円となり、売上高営業利益率は1.6ポイント改善し10.0%となった。

営業外損益は114億円の益となり、前年同期比71億円改善した。タイのPTT Asahi Chemical Company LimitedでANやメチルメタクリレート(以下、MMA)が順調に推移したこと等により持分法投資損益が改善した。

特別損益は 108 億円の益となり、税前利益は 1,714 億円となった。

法人税等について、2016 年度、2017 年度はそれぞれ特殊な要因で税率が下がっている。2016 年度は持株会社と事業会社 3 社の統合により、税効果会計基準に従って繰延税金資産の回収可能性を見直した結果、法人税等が減少した。2017 年度は米国税制改正の影響により税率の引き下げが決定したため、税効果会計基準に従い ZOLL、Polypore 買収時に計上した繰延税金負債の取り崩しを行った結果、法人税等が減少した。第 3 四半期累計の法人税等は前年同期比 10 億円減少し、295 億円となった。

親会社株主に帰属する四半期純利益は 1,403 億円となり、前年同期比 507 億円、56.5%の増益となった。

P6 特別損益

特別利益は 156 億円で、前年同期比 57 億円の増益となった。政策保有株式の売却を進めたことにより投資有価証券売却益を計上した。特別損失は 48 億円で、前年同期比 21 億円の改善となった。

結果として特別損益は 108 億円の益となり、前年同期比 78 億円の改善となった。

P7 連結貸借対照表

2017 年 3 月末と 12 月末を比較すると総資産が 1,680 億円増加した。販売が好調であったことや期末休日の影響で現預金、売掛債権等が増加した。また、保有株式の時価が上昇したこと等により投資有価証券残高も増加した。

負債は 175 億円増加した。米国税制改正の影響により繰延税金負債を取り崩したことで固定負債が減少したが、期末休日の影響で買掛債務等の流動負債が増加した。

純資産は 1,505 億円増加した。四半期純利益を

1,403 億円計上したことが主な要因だ。

P8 連結キャッシュ・フロー計算書

営業活動によるキャッシュ・フローは 1,540 億円のキャッシュ・インとなった。税金等調整前四半期純利益 1,714 億円を計上したことが主な要因だ。

投資活動によるキャッシュ・フローは 691 億円のキャッシュ・アウトとなり、フリー・キャッシュ・フローは 850 億円のキャッシュ・インとなった。

財務活動によるキャッシュ・フローは配当の支払い等により、431 億円のキャッシュ・アウトとなった。

結果として、現金及び現金同等物の四半期末残高は 1,913 億円となった。

P10 セグメント別売上高・営業利益（2）（9ヶ月累計・4—12月比較）

「マテリアル」、「住宅」、「ヘルスケア」全てのセグメントにおいて、前年同期比増収・増益となった。

P13 事業別売上高・営業利益増減要因（9ヶ月累計・4—12月比較）（1）

P14 事業別売上高・営業利益増減要因（9ヶ月累計・4—12月比較）（2）

繊維事業は増収・微増益となった。

原燃料価格高騰の影響を受けたが、カーインテリア向け等に使用される（マイクロファイバースエード）「ラムース」等の業績が好調に推移した。

ケミカル事業は増収・増益となった。

石油化学事業は、AN や MMA 等で交易条件が改善し増収・増益となった。第 3 四半期累計平均では、AN 市況 1,637 ドル/トン、プロピレン市況は 908 ドル/トン、原料スプレッド 729 ドル/トンとなった。特に第 3 四半期平均の原料スプレッ

ドは 865 ドル／トンとなり、増益に寄与した。

高機能ポリマー事業は、合成ゴムにおいて交易条件が改善したことや、エンジニアリング樹脂の販売が順調に推移したこと等から増収・増益となった。

高機能マテリアルズ事業・消費財事業は、イオン交換膜や電子材料製品等の販売数量が増加したこと等から増収・増益となった。

エレクトロニクス事業は増収・増益となった。

セパレータ事業は増収・増益となった。リチウムイオン二次電池（以下、LIB）用セパレータを中心に各製品の販売数量が大幅に増加した。

電子部品事業も増収・増益となった。カメラモジュール用電子部品や家電向け磁気センサ等の販売が順調に推移した。

住宅事業は増収・増益となった。

建築請負部門は、(集合住宅)「ヘーベルメゾン」の引渡棟数が減少し、広告宣伝費等の販管費が増加したこと等から減収・減益となったが、不動産部門・リフォーム部門は増収・増益となった。不動産部門の賃貸管理事業および分譲事業がともに順調に推移し、リフォーム部門も堅調に推移した。

建築請負部門の受注高は、2017 年度上期では前年同期を下回ったが、第 3 四半期は前年同期比 16.4%の受注増となり、第 3 四半期累計は前年同期並みとなった。戸建住宅の受注は減少したが、賃貸住宅等の需要が堅調に推移し、集合住宅の受注が増加した。

建材事業は、売上高は増収、営業利益は前年同期並みとなった。(フェノールフォーム断熱材)「ネオマフォーム」等の販売数量が堅調に推移したが、原燃料価格高騰の影響を受けた。

医薬・医療事業は増収・増益となった。

医薬事業は減収・減益となった。(骨粗鬆症治療剤)「テリボン」等の販売数量が増加したが、(排尿障害改善剤)「フリバス」を中心に後発医薬品の影響を受けた。

医療事業は増収・増益となった。各事業とも堅調に推移したことに加え、円安の効果もあった。

クリティカルケア事業は増収・増益となった。医療機関向け除細動器の販売数量が増加し、(着用型自動除細動器)「LifeVest」の業績が堅調に推移した。

P16 当期の業績予想

今回予想と前回予想を比較すると、売上高、営業利益、経常利益、当期純利益の全ての項目で上方修正し、過去最高を更新する見込みだ。営業利益は、AN の交易条件改善やセパレータ事業、クリティカルケア事業の数量拡大等により、120 億円上方修正した。

また、米国税制改正の影響により繰延税金負債を見直した結果、税金費用が約 160 億円減少したこと等から、親会社株主に帰属する当期純利益は 290 億円の上方向修正とした。

2017 年度の 1 株当たり年間配当金は、2017 年度第 2 四半期決算説明時と同じく 1 株当たり 28 円としたが、今後 2017 年度通期の業績を踏まえ、当社配当方針に則って検討を行い、2017 年度決算説明の場で改めてお伝えする。

今回予想の前提は、下期のナフサ価格を 46,900 円/KL、年間 42,250 円/KL、為替レートは下期、年間ともに 111 円/ドルとした。

P18 事業別営業利益

事業別の通期予想について、営業利益予想を中心に前回予想との比較で説明する。

繊維事業は、前回予想から各製品の事業動向に大きな変動はなく、前回予想どおりとした。

ケミカル事業は、95 億円上方修正した。石油化学事業で、米国ハリケーンによる競合他社のプラントトラブルの影響により AN 市況が上昇したことに加えて、高機能ポリマー事業や高機能マテリアルズ事業・消費財事業も堅調に推移することを見込む。

2017 年度 1—3 月期（以下、第 4 四半期）の前提は、AN 市況 1,800 ドル/トン、プロピレン市況 1,090 ドル/トン、原料スプレッド 710 ドル/トンとした。

エレクトロニクス事業は、15 億円上方修正した。

セパレータ事業は、LIB 用乾式セパレータの数量が伸びることから上方修正した。

電子部品事業は、中国スマートフォン向け需要の減速の影響を受けるが、家電向け等スマートフォン以外の需要が好調なことや円安の効果もあり、上方修正した。

住宅事業は、建築請負部門では引渡棟数が計画どおりに進捗する見込みであり、不動産部門、リフォーム部門も堅調であることから前回予想どおりとした。

建材事業は、各事業が堅調に推移することを見込み、前回予想どおりとした。

医薬・医療事業は、10 億円上方修正した。

医薬事業は（血液凝固阻止剤）「リコモジュリン」等の販売数量が前回予想で見込んだ販売計画には及ばないことや、研究開発の加速に伴う固定費の増加等を見込み、下方修正した。

医療事業は、一時的な特許使用料の収入を計上することや製品構成差による原価率改善を見込み、上方修正した。

クリティカルケア事業は、10 億円上方修正した。医療機関向け除細動器が引き続き順調に数量

拡大することを見込む。

【質疑応答】

モルガン・スタンレーMUFG 証券・渡部氏 エレクトロニクス事業について、セパレータ事業、電子部品事業ともに好調との説明だったが、第 2 四半期から第 4 四半期にかけての各事業の動きについてお願いする。特に第 2 四半期から第 3 四半期にかけては減収に対して微増益となっているので、その背景も伺いたい。

高嶋 電子部品事業については、第 2 四半期から第 3 四半期にかけて好調は続いているものの、スマートフォン向け需要のピークが第 2 四半期にあったため、売上高については減少傾向にある。営業利益も減少傾向にある。先々の需要減に伴う外部委託費の減少は若干の増益要因になっているが、売上減に伴う減少に加え、年度後半にかけて償却負担が増加していくこと等の要因を見込む。

福田 セパレータ事業は、第 2 四半期から第 3 四半期にかけて増収・増益となった。LIB 用セパレータは車載向けで数量を伸ばし、（鉛蓄電池用セパレータ）「ダラミック」も堅調に数量を伸ばしたことから、それぞれ増収となった。営業利益は増収に伴って増益となった。第 3 四半期から第 4 四半期にかけては、減収・減益を見込んでいる。LIB 用セパレータで、季節要因による需要減と民生用途の大手顧客での生産調整等から減収を見込み、更に期末の固定費増や将来の増産に向けた費用の増加等を織り込み、減益の計画とした。

渡部氏 LIB 用乾式セパレータは想定より好調、湿式セパレータは想定どおりとの理解でよいか。

福田 そのとおりだ。

渡部氏 石油化学事業で、第 4 四半期の AN とプ

ロピレンの市況前提は現時点の市況とほぼ変わらないが、現在の AN の需給環境や、市況があまり変動しないと見る背景について伺いたい。

堀江 AN の供給については、依然として不足気味の状態が続いている。ハリケーンによる影響からの米国メーカーの回復がある一方で、第 4 四半期にはアジアで大型の定期修理が予定されていること等から、供給面であまり大きな改善は無いと見ている。需要については、今後旧正月を控えてはいるが現時点であまり大きな変動は無く、好調な状態が続いているため、市況、スプレッドは現時点の数字に近いものが 3 月まで維持できると見ている。

大和証券・梅林氏 医薬・医療事業の第 3 四半期は前年同期比で増益だが、その主な要因としてコスト差等が 18 億円改善している。これはロイヤリティ収入という理解でよいか。

門倉 医療事業で第 3 四半期に特許使用料による収入があり、コスト差等の 18 億円に含まれている。医薬事業を含め、これ以外に特殊な要因は無い。

梅林氏 住宅事業で受注が回復してきている背景を伺いたい。また、資材価格が上昇する中、年初計画以来利益見通しを据え置いているが、コストダウン等が進んでいるかについても伺いたい。

富岡 受注の回復については、上期より強化してきた営業人員の訓練の効果が出てきている。それに加えて「比類なき壁」キャンペーンが営業活動を後押しし、顧客の検討期間短縮につながったと分析している。また、上期は働き方改革で業務システムの変更等への対応にかかっていたが、下期にそれらが定着してきたことから効率的な業務遂行が可能になり、良い影響を及ぼしていると見ている。資材価格やコストダウンについて

は、ほぼ想定どおりだ。物流費が若干上昇しているが、計画に織り込み済みである。

みずほ証券・山田氏 医薬・医療事業についてだが、医療事業のロイヤリティは 18 億円という理解でよいか。また、「リコモジュリン」が販売計画未達となった背景や、「リコモジュリン」の海外臨床試験の進捗状況、今後の「リコモジュリン」の販売見込み等について願います。

門倉 医療事業の特許使用料による収入は、コスト差等 18 億円の内数であり、全額ではない。金額については非開示だ。

濱 「リコモジュリン」は、第 3 四半期累計で販売数量が前年同期を下回っている。血液凝固阻止剤における「リコモジュリン」のシェアは増加傾向が続いているが、医師の薬剤使用に対する理解が深まり、1 症例当たりの投与量・投与日数が少なく使用される事例があることも数量減の一因と見ている。対象となる診療科も広いことから、拡販にあたっては医師に対する啓発が必須で、容易ではない。引き続きプロモーション活動を展開していく。

「リコモジュリン」の海外臨床試験は、順調に症例が獲得できている。2024 年承認を目指す計画は変わっていない。順調に症例獲得が進んでいることから、前回予想よりも臨床試験に関する費用が増加している。

山田氏 高機能ポリマー事業の合成ゴムの交易条件改善に関し、低燃費タイヤ向け合成ゴムの出荷数量や原料スプレッドの状況は第 3 四半期、第 4 四半期、また 2018 年度に向けても問題無いと理解してよいか。エンジニアリング樹脂も同じように理解してよいか。また、高機能マテリアルズ事業・消費財事業はどうか。消費財事業は 2 年連続でかなり好調だと思うが、背景をどのように見

ているか。これらは持続可能か。

桑葉 合成ゴムの取引条件の改善については、2017年度の第1四半期に特異な動きが見られた。2016年度第4四半期のブタジエン市況が非常に高騰し、結果として2017年度第1四半期に合成ゴムの価格が上昇したが、一方でブタジエン市況はこの第1四半期に急落したため、取引条件は大きく改善した。その後、ブタジエン市況は落ち着いており、2017年度下期から2018年度にかけては大きな変動も無く順調に推移していくと見ている。合成ゴムの販売量も、2017年度下期から2018年度にかけては順調に推移すると見込んでいる。上期は、値上げを見越した買い控え等があったが、下期に入り回復軌道に乗ってきている。エンジニアリング樹脂の販売も堅調だ。主要マーケットの自動車も、米国は多少停滞しているが、中国等で自動車生産および販売は順調だ。若干の原料価格上昇は見られるが、期ずれはあるものの値上げ活動等で吸収できる。

門倉 消費財事業は、2016年度からの「サララップ」の出荷数量好調が継続している。需給バランスは締まっており、これに伴う仕切単価の上昇も業績向上の一因となっている。高機能マテリアルズ事業では、イオン交換膜は苛性ソーダの需要好調により好調な出荷が続いている。また、電子材料製品はスマートフォン向けの需要が好調であったことや、高付加価値品の比率が高まってきたことから、製品構成としても良い状況が続いている。

山田氏 合成ゴムでは、先日競合他社において海外プラントの減損処理の報道があったが、旭化成では採算性、数量ともに全く問題無いという理解でよいか。

桑葉 その理解で問題無い。

SMBC 日興証券・竹内氏 決算説明会資料の22ページを見ると、ケミカル事業の営業利益が、第3四半期から第4四半期にかけて約110億円減少する想定となっている。事業毎の営業利益の方向性とその背景を説明してほしい。

堀江 石油化学事業については、ANの市況が第3四半期に高騰しスプレッドが拡大したが、第4四半期にかけて徐々に落ち着いていくことを見込んでいる。これを主要因に、石油化学事業は減益を予想している。

桑葉 高機能ポリマー事業については、需要については、合成ゴム、エンジニアリング樹脂ともに順調な推移を見込む。合成ゴムは、第4四半期に定期修理を予定していることから減益を想定する。エンジニアリング樹脂は、販売数量の順調な推移により増益を見込む。高機能ポリマー事業全体としては、若干の減益を予想する。

門倉 高機能マテリアルズ事業・消費財事業については、消費財事業のサララップの例年の季節要因による影響が最も大きい。年末に出荷が集中し、1-3月はその反動で減る。2017年度も同じ傾向だ。また、高機能マテリアルズ事業の電子材料製品において、第4四半期に旧正月の影響によるスマートフォン等の需要の減少を見込む。イオン交換膜は四半期単位の比較では出荷数量の増減が大きい中で、第3四半期から第4四半期にかけては出荷数量の減少を見込む。これらの要因から、高機能マテリアルズ事業・消費財事業は減益を想定し、ケミカル事業の中では石油化学事業に次ぐ2番目の減益幅となる。

竹内氏 高機能ポリマー事業は若干の減益という説明だったが、第4四半期のナフサ価格の前提は49,200円/KLという水準だ。原料価格の上昇は、基本的に大きな時間差なく価格へ転嫁されて

いるという見方でよいのか。

桑葉 その理解で正しい。

竹内氏 AN の稼働率について、第3四半期の実績と第4四半期の見方に変化がないかを伺いたい。

堀江 第3四半期の稼働率はグループ全体で90%程度で、これまでの80~85%に対して上昇している。第4四半期も同様に90%程度の稼働を維持していく予定だ。

竹内氏 競合他社のハリケーンからの回復等はあるが、まだ本格的ではなく、基本的には足元並みの稼働は維持できるという見方でよいのか。

堀江 その見方でよい。アジアの競合他社が定期修理を計画しており、アジアでの供給バランスは大きく変わらないと考えている。

竹内氏 クリティカルケア事業の「LifeVest」について伺います。売上高の伸びや、人員の採用の進捗、また米国食品医薬品局（Food and Drug Administration、以下、FDA）から安全性情報が公表されたが、これによる影響は無いということでのよいのかを解説いただきたい。

門倉 2017年度は、医療機関向け除細動器が大きく販売数量を伸ばしている。競合他社で一部製品の出荷が差し控えられており、ZOLL がシェアを伸ばしているという流れは現在も続いている。「LifeVest」については、ほぼ計画どおりの拡大を見ている。また、人員の採用とそれに伴う販管費の増加も計画どおりの進捗だ。先日FDAが公表した安全性情報については、事業への影響は全く無い。

UBS証券・宮本氏 まずエレクトロニクス事業について、営業利益を上方修正している一方で売上高を据え置きとしている背景を改めて確認させていただきたい。

福田 セパレータ事業は、売上高、営業利益ともに上方修正をしている。LIB用セパレータは主に乾式膜の数量増により増収となり、「DRAMミック」も若干の増販を見込んでいる。

高嶋 電子部品事業は、中国のスマートフォン市場の減速を受け、売上高は下方修正した。一方で、スマートフォン以外の市場において、中国向けの家電、電動工具等で堅調な動きになっており、また外部委託費の減少等も加え、営業利益は上方修正している。

宮本氏 15億円の営業利益の上方修正のうち、セパレータ事業と電子部品事業とではどちらの方が大きいのか。

門倉 その内訳は開示していない。

宮本氏 セパレータ事業の乾式膜の稼働が想定以上になっていると思うが、第2四半期決算説明では乾式膜が下期の終わり頃にはフル稼働になるという説明だったが、第3四半期時点での稼働状況について確認したい。

福田 乾式膜は既にフル稼働になっており、将来の増産計画を進めているところだ。

宮本氏 第3四半期の時点でフル稼働で、第4四半期もフル稼働という認識でよいのか。

福田 そのとおりで。

宮本氏 ケミカル事業について、第2四半期から第3四半期への動きを事業毎に解説いただきたい。

堀江 石油化学事業については、ANのスプレッドが高かったことを最大の要因として、大幅に増収・増益となった。

桑葉 高機能ポリマー事業については、販売量は合成ゴム、エンジニアリング樹脂ともに伸びている。エンジニアリング樹脂については、第3四半期に定期修理を実施したことが減益要因となっ

ている。合成ゴムについては、スチレンモノマー（以下、SM）価格等の上昇により、交易条件が悪化した。これらにより、高機能ポリマー事業としては減益となった。

門倉 高機能マテリアルズ事業・消費財事業は増益となった。内訳としては、第3四半期から第4四半期にかけての状況と逆になっており、消費財事業において「サランラップ」を中心に年末の需要期を迎えるため、増益となった。また高機能マテリアルズ事業において、イオン交換膜の出荷が第3四半期に集中したため、増益となった。

宮本氏 原料高や在庫要因等は、第2四半期から第3四半期にかけてはあまり大きく影響しなかったという理解でよいのか。

堀江 石油化学事業については、ナフサ価格が徐々に上がってきており、総平均差によって若干のプラスに働いているが、根本的には交易条件の改善の方が大きく寄与している。

桑葉 高機能ポリマー事業については、合成ゴムでSM価格上昇の影響を若干受けている。また、エンジニアリング樹脂ではポリプロピレン価格の上昇の影響を受けている。

門倉 高機能マテリアルズ事業・消費財事業については、原料価格の上昇、在庫要因の大きな影響は受けていない。

シティグループ証券・池田氏 セパレータ事業について、乾式膜の状況がかなり良くなっていると思うが、特に中国が良かったのか。またLIB用セパレータの増設を先日発表し、投資金額は湿式膜と乾式膜を合わせて75億円とかなり少ないが、こういった背景があるのか。また数量のトレンドを伺いたい。

福田 まず乾式膜の動向に関しては、当初の計画と比較し、車載用途は個別の顧客あるいはプログ

ラム毎に見ると増減はあるが堅調だ。加えてエネルギー貯蔵システム（Energy Storage System、以下、ESS）という新たな用途が立ち上がったことにより、数量が増えている。設備投資に関しては、今回は乾式膜において、Polyporeの買収時に取得した製造インフラを最大限に活用できるというメリットがあり、非常に効率の良い設備投資ができた。販売数量に関しては、湿式膜、乾式膜合計で、前年同期比で概ね30%程度増加している。

池田氏 販売数量の増加はESSが牽引しているのか。ESSは、韓国の電池メーカーによるオーストラリアの案件の獲得等、市場としては伸びているのかと思うが、アップデートをお願いしたい。また車載において想定よりも増えているところがあるのかどうか、補足いただきたい。

福田 車載については概ね当初の計画どおりに伸びている。ESSについては、当初の期待以上に伸びている。

池田氏 ANで、2018年に中国で新設工場が立ち上がったというところもあるが、基本的にそれほど供給は増えないので2018年も需給バランスはかなりタイト基調が続くと思うが、需要の面も含めて需給バランスの見方のアップデートをお願いする。

堀江 中国の新設プラントは、早ければ2018年の年明けから稼働を始めると言われていたが、安全基準や環境規制の強化等でプラント稼働の認可が遅れていると聞いている。現時点では中国の新設プラント13万トン／年がいつから稼働開始するか確定的な情報は無い。一方で需要に関しては、中国の内需好調が維持されればABS樹脂向け需要の好調継続が期待され、また原油価格上昇によるシェールオイル増産でANの需要も増えると

見込まれることから、全体では2～3%程度の成長は続くと考えている。従って、需要の成長率からすると中国の新設プラント13万トン/年が立ち上がっても市場の伸びで吸収され、需給バランスに大きな変動は無いと考えている。

池田氏 第4四半期にANメーカーの定期修理があるので供給はタイト基調で、中国で新設プラントが立ち上がっても大きく市況は崩れるというリスクは見当たらないという理解でよいか。

堀江 中国経済の先行き、金融政策等によって内需がどうなるかという部分が1つのリスクだが、まだそういった兆候が見えていないので、今のところは大きな変動は無いと考えている。

野村証券・岡峯氏 エレクトロニクス事業で、第3四半期から第4四半期にかけての損益悪化について、セパレータ事業と電子部品事業それぞれで数量とコストの影響はどうか。足元ではスマートフォン向けの需要が旧正月の影響で悪化していると思うが、この回復の時期や、ハイエンド品が伸びていないということによる影響について伺いたい。また、LIB用セパレータの車載用途について、2018年度以降の引き合い状況や需要動向に何か変化があるかについても伺いたい。

高嶋 電子部品事業の第3四半期から第4四半期の動きは、通常どおりの季節要因と、中国スマートフォン需要の低迷ということで第4四半期は需要減を見込む。今後の需要動向については、中国市場でのスマートフォン高級機種需要回復には時間がかかりそうだ。一方で高級機種需要がインド等他の地域で立ち上がれば新たなビジネスチャンスにつながるのではないかと考えている。また、中級機種が高機能化することで高級機種に使用されている部品が中級機種にも採用されるということも期待して市場を注視して

いきたい。

福田 セパレータ事業の第3四半期から第4四半期の動きは、第4四半期は旧正月による減産に加え、民生の大手顧客での生産調整等もあり、数量減により減収となっている。コスト要因では、例年期末に固定費の発生が集中することと、2018年度以降の増産に向けた先行費用等の発生を織り込み、減益を見込んでいる。2018年度の見込みについては、乾式膜、湿式膜ともに引き合いは引き続き旺盛で、現在、両プロセスとも生産体制の増強を行っている。

岡峯氏 確認だが、先ほどLIB用セパレータが概ね3割程度の数量増とのことだったが、これは第3四半期の前年同期比ということによいか。

福田 はい。

岡峯氏 採算状況について、LIB用セパレータは、これまで数量が拡大し採算も改善しており、2018年度以降も大きなトレンドとしては期待できるという理解でよいか。

福田 増収に伴って増益となっており、のれんおよび無形固定資産の償却後でも下期、そして年間でも黒字となる見込みだ。この傾向は2018年度以降も続くと計画している。

JP モルガン証券・梅田氏 セパレータ事業について確認だが、第3四半期から第4四半期にかけて乾式膜、湿式膜で分けると数量の増減はどう見ているか。併せてセパレータの平均単価については状況に変化があるか、ないし変化が出てきそうかというところを確認させていただきたい。先日メディアの報道でもあったが、民生向けの円筒電池は供給不足で一部製品で値上がりしているという話も出ている。これによりセパレータの価格下落の動きに何か変化が出ているか。もしくは、製品のミックスを考えれば乾式膜の構成が上が

ったり、車載の構成が上がるのでそんなに変わらないと見ているのか。

福田 単価の動きについては特に大きな変化は無い。価格引き下げの要求は引き続き厳しいものがある。ご指摘のとおり、製品の構成により多少平均単価に変化はある。

第3四半期から第4四半期にかけての数量の動きについては、湿式膜を中心に民生用途の大手顧客での生産調整や、民生用途中心に中国での季節要因を織り込んでいる。

梅田氏 製品のミックスに変化があるというのは、これは乾式膜の数量が出ているとか、車載用途の構成が上がるのでミックスとしては悪化してくると理解した方がいいということか。

福田 平均単価が製品構成によって変化してくることが、必ずしも採算に影響するというわけではない。

[終了]